MyCUL

Chuo University Library

48
November 2026
Autumn

特集

吸血鬼は、いつからコウモリに変身するようになったのか

『ビーグル号航海の動物学』(第1巻第2部、哺乳類)[15]中の、カーティスによるナミチスイコウモリ*Desmodus rotundus*(= *Desmodus d'orbignyi*)の図 (PL. 1).

CONTENTS

■特集　吸血鬼は、いつからコウモリに変身するようになったのか　経済学部教授　黒須 詩子
■中央大学図書館 学生ボランティア　りぶさぽ ～ Library Supporters ～　始動！！
■中央図書館 2 階が新しくなりました！
■日・EU フレンドシップウィーク企画展
「食で読み解く EU―27 か国の多様性と持続可能な食卓の現在地」を開催
■新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録（2025.5～2025.10 収集分）

中央大学図書館

特集

吸血鬼は、いつからコウモリに変身するようになったのか

経済学部教授　黒須 詩子

この小文では、吸血鬼vampireが犠牲者を訪れ血を啜るときにコウモリに変身するイメージはいつ生まれたのか、それはブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(1897)[1]以来なのか、という問題を扱う。ブラム・ストーカーの「伯爵」は、ルーマニア(トランシルヴァニア)及びイギリス(主にロンドン)、つまり旧大陸ヨーロッパで暗躍するが、吸血コウモリはメキシコ、ペルーなど中南米にのみ分布するので、吸血鬼は狼など自在に動物に姿を変えるとしても、コロンブスによるアメリカ大陸の発見までは、吸血コウモリには変身しなかったはずである。すでにこの問題を指摘した書き手はいて、ブラム・ストーカーが初めて吸血鬼とコウモリを強く結びつけた、つまり、ドラキュラ伯爵がコウモリに変身するというのはストーカーの「発明」であった、という主張がある[2),3),4)]。ここで再検討してみたい。

1 ナミチスイコウモリとその生態

現存の吸血コウモリとしてシロチスイコウモリ*Diaemus youngii*、ケアシチスイコウモリ*Diphylla ecaudata*、ナミチスイコウモリ*Desmodus rotundus*3種が存在し、そのうちのナミチスイコウモリは個体数が多く、メキシコやペルー、中央アメリカ、南アメリカ、マルガリータ島、トリニダード島など広域に分布する[5)]。吸血鬼がコウモリに変身し、犠牲者から生き血を啜ることによって不死を得るという不気味で奇矯、邪悪なイメージとは裏腹に、実際のナミチスイコウモリは、進化生態学において互恵利他主義(血縁関係のない個体に利他行動を示す)の実例の金字塔として、揺るぎない地位を獲得した[6),7)]。

ナミチスイコウモリは、8~12個体の大人のメスが木の空洞などに集団で棲みつく。成獣は哺乳類の血液を常食にし、夕方になると吸血に出かけ馬や牛などの家畜、稀に人などを襲う。鋭い歯で傷をつけ「30分以上かけて、25 ml程度までの血を舐めて飲む」[8)]。しかし、襲われた哺乳動物は気づいてコウモリを払い落とすので、吸血に熟練していない若い個体を含む相当数が吸血できずに帰ってくる。ジェラルド・ウィルキンソンはコスタリカで、1980年代初頭にナミチスイコウモリを観察した:コウモリが採餌(吸血)に出かける前に捕獲して飢えさせ、再び明け方に休息場に戻すと、吸血しなかった個体が充分に餌を手に入れた個体から吐き戻した血をもらうのを確認した。吸血できなければナミチスイコウモリは48時間後には絶命する。彼らは自身を飢餓の危険に晒してもねぐらを共にする仲間には、子供や姉妹などの血縁者以外にも、利他行為を示すのである。

2 ナチュラリストたちに人気のチスイコウモリ

不気味で悪魔的なイメージから、チスイコウモリの存在は、意外に早くから人口に膾炙していた。1763年にビュフォンが『博物誌』第10巻において、初めてラテンアメリカに生息するヘラコウモリ科のチスイコウモリをvampire として紹介した[9)]。ナミチスイコウモリは、1810年にエティエンヌ・ジョフロワ・サンティレールにより、*Phyllostoma rotundum*として記載された[10)]。

その特異な生態から、チスイコウモリは、ナチュラリストたちの好奇心を引き付けてやまず、ビュフォンをはじめ、多くの博物学書に登場する[11),12),13),14),15)](図1)。チャールズ・ウォータートン[13)]は、タフな探検家であり好事家と言われるような人物で、1812年から1824年にかけ4度南米を旅行し、その折はチスイコウモリに吸血されようと、就寝時わざとハンモックの蚊帳の外に足を出していた。コウモリは大量の血を吸うわけではないので、襲われた哺乳類を死に至らしめることはないことを、身をもって確かめようとしたのである。彼はコウモリに襲われることを熱望していたが、はたせなかった。しかし、チスイコウモリは狂犬病などを媒介することがあるので、このような「実験」はかなり危険であろう。

チャールズ・ダーウィンは、1831年12月に南米を目指してビーグル号に乗船した。彼がウォータートンの紀行文を読んでいたのは確実だが、より慎重であり、自らコウモリに吸血される計画はなかったようだ。翌年5月にチリで使用人が生きたナミチスイコウモリを捕獲した[14)]。「吸血コウモリはしばしば馬の肩に咬みついて、大きなトラブルを引き起こした。噛み傷からの出血そのものは、普通、大した影響を及ぼさ

ないが、あとで鞍が擦れて炎症を起こすと大ごとになる…だから、そのコウモリの一種デスモドゥス・ドルビニー*が馬の背で実際に捕まえられた現場に居合わせたことは、幸運だった。」ダーウィンは、従来言われてきたように、襲われた動物は失血により死ぬ、ということはないのを確かめることができたのである。「吸血された馬などの家畜が弱って死ぬ」と複数の著者が言及しているのは、ビュフォンの『博物誌』第10巻における記述に由来するらしい。ダーウィンの記述は抑制的だが、初めて吸血コウモリを観察した喜びを見てとれる。『ビーグル号航海の動物学』[15]では、チャールズ・M・カーティスによる吸血コウモリ*Desmodus d'orbignyi*の有名な図版とともに、「コキンボ近く、ダーウィンの馬の背で捕獲された」という解説が付いている。

ガルシア・マルケスの『愛その他の悪霊について』は博物学書ではないが、登場人物の侯爵について次の印象深い記述がある。「彼は意気の上がらぬ、尻を貸すほうが好きそうな男で、夜毎コウモリに血抜きをされるせいで顔色は百合のように青白かった。」

**Desmodus d'orbignyi*は*D. rotundus*のシノニム。ダーウィンは、この後パンパスでサシガメに吸血され、トリパノゾーマに感染し、それが晩年の不調の原因となった可能性が指摘されている。

3 血液食という生活、その非効率

「血こそ命！」と、レンフィールドは『吸血鬼ドラキュラ』の中で叫ぶ。吸血鬼が生き血を啜ることにより犠牲者の生命力を奪取するというこのイメージとは逆に、「吸血」という摂食様式は現実には栄養摂取の効率が悪い。一般に、生物にとって全面的に栄養を血液に依存するのは、ハードルが高く難題なのである。血液はタンパク質が豊富であるが、糖やビタミンが少ないからだ。脊椎動物で食物を血液に全面依存している種は少なく、ガラパゴス島の吸血フィンチ、ヤツメウナギなどが挙げられるが、哺乳類ではチスイコウモリ以外に知られていない。昆虫では、吸血する種は多数派ではないが、多くの分類群に偏在している。

ミロラド・パヴィッチの『ハザール事典　女性版』にはモーラ（女の吸血鬼）が夜毎、実の息子を訪れ血を啜る、という奇譚が出てくる。東欧の伝説では、不遇な死を遂げ吸血鬼となったものは、最初に家族を犠牲にするということだ。ところが、これはある種のアリでは、日常的に起こっていることである。わが国屈指のアリ学者、増子恵一は、原始的なアリの1種ノコギリハリアリ*Amblyopone silvestrii*の女王が自分の子供の体表を傷つけリンパ液を啜るが、死に至らしめることはなく、幼虫は無事成長するという現象を1986年に報告した[16]。日本産吸血アリの発見である。女王は、触角で幼虫を撫で回し、側面から顎で挟む。数回の挟みで顎先が幼虫背面の皮膚を貫通し、体液の滴が傷口から流出する。女王は即座に下口部を穿孔に付着させて滴を舐め、その後数分間「凍りついたように」静止する。子供は、女王が与えるジムカデなど節足動物を餌とする。

図1. 右下がナミチスイコウモリの頭部. ゴールドスミス『動物誌』(Goldsmith, Oliver. A history of the earth and animated nature. A. Fullarton and Co., 1851. vol. 1, pl. 15.)より.

アブラムシは、疑いもなく草食派だと考えられていたが、ピスタキアに虫瘤を作るハルカワネアブラムシ*Paracletus cimiciformis*は、2次寄主世代（虫瘤から移住した世代）が地下でイネ科植物の根に寄生するが、その中にアリ（*Tetramorium*）の幼虫からリンパ液を啜る「ヴァンパイア」型の個体がいることが近年見いだされた[17]。アリの幼虫に似た体表炭化水素（匂い）を自ら分泌することでアリの幼虫に擬態し、巣に引き込まれていく。この場合も、リンパ液を啜られたアリ幼虫は死ぬことはない。

スイス出身のハンス・ベンツィガーは、東南アジアで30年にもわたりヤガ上科のエグリバ類*Calyptra*を研究し、8種が吸血性であることを見いだした[18]。ベンツィガーは、1967年に、やはり自身を実験台に蛾による吸血を証明しようと、「焼け付くような痛み」に耐え、エグリバの一種*Calyptra eustrigata*に自分の指から吸血させることに成功したのである。この蛾の口器の先端は、恐ろしいサカトゲ状になっている。

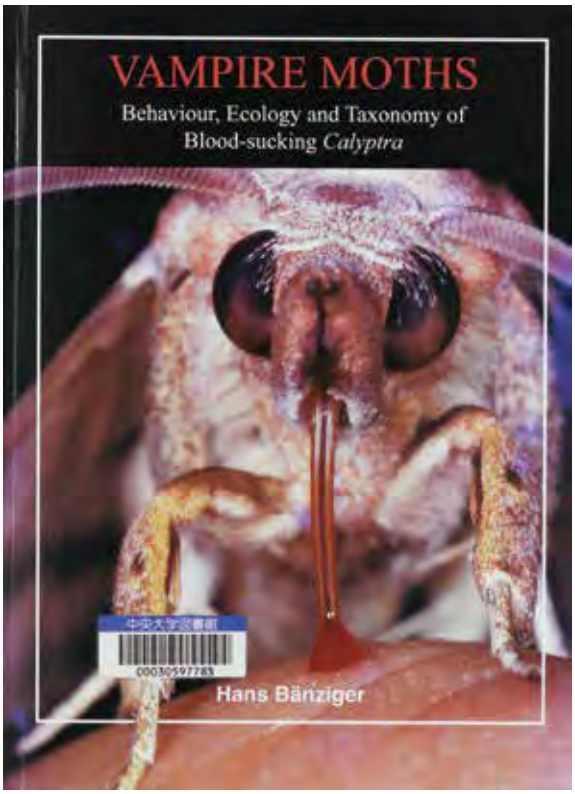
成虫は、オス・メス共にイチジク類などの果実から吸汁するが、オスだけが吸血習性を併せ持つ。しかし、血球を消化するプロテアーゼ（タンパク質分解酵素）は持っていない。交尾時に必要な、なにか希少な物質を血液から摂取しているのではないかと想像される。

共生微生物研究の泰斗ポール・ブフナーは、909頁の大著（1953年に出版された本の英語版）の83頁分を、血液食、ケラチン食の動物に割き[19]、ヒル、ヒメダニ、マダニ合わせて6種、昆虫類のツェツェバエ、クモバエ、シラミ、サシガメ、ナンキンムシ、ハジラミ合わせて29種について高倍率顕微鏡による観察結果の図を示し、吸血動物は共生微生物に栄養摂取を助けてもらっている可能性を示唆している。その意味で、血液食のチスイコウモリは、その代謝生理学を考えると、大変興味深い。チスイコウモリも吸血昆虫同様、体内に多様な共生微生物ファウナを保持し、栄養摂取を手伝ってもらっている可能性が高い[20]。

4 吸血鬼文学

有史以前から、人類は自分たちの存在を脅かすものとして、吸血鬼幻想に取り憑かれた。紀元前にはすでに、素朴な土着の信仰と結びついた吸血鬼伝説が存在した[2),21),22)]。非業の死を遂げた英雄も吸血鬼になる。ペストなど疫病の流行した時代には、生きたまま棺桶に入れられた犠牲者が蘇生するという強迫観念

図 2.ベンツィガー博士の著書『Vampire Moths』[18]の表紙. 博士自身の指からヤガの一種*Calyptra eustrigata*が吸血している.



も手伝い、吸血鬼信仰は脈々と継承されていく。

ギリシャ、ローマ神話では、エンプーサ、ラミア、ストリガといった女の魔物が、血を求めると考えられた。ルーマニアでは、「ストリゴイ Strigoii」が吸血鬼を指す言葉であった。映画のタイトルとなった「ノスフェラトゥ Nosferatu」も、ルーマニアでは邪悪な存在を直接呼ぶのは禁忌であり、「アレ」くらいのニュアンスで「ネクラート Nekurato」と呼ぶのが訛ったということだ[2)]。特に、ギリシャでは、「ブルコラカス Brucolocas（完全に死んでいないもの）」[2)]と呼ばれ、もともと「オオカミ男」の意味を持つと言われるが、ストーカーの作品では、「アンデッドUndead」という言葉が使われている。

そういった原始信仰に由来する吸血鬼であったが、バイロンの主治医ポリドリが、1819年に初めて散文の洗練された吸血鬼文学書を著した。ポリドリは、最初の小説『吸血鬼ラスヴァン』をなぜかバイロンの名前で発表している[23),24)]。一方バイロンも未完の原稿、『吸血鬼ダーヴェル』[23)]を残しているので、どちらが吸血鬼小説の創設者かということは微妙な問題となる。また、レ・ファニュの『カーミラ』も、吸血鬼小説に与えた影響は無視できない。吸血の犠牲者は常に女性であり、吸血鬼カーミラは、美しい優雅な少女である。しかし、これらの小説には吸血鬼が変身した形態としてのコウモリは登場していない。

2つのアンソロジー、『ドラキュラドラキュラ』[24)]と、『吸血鬼ラスヴァン』[23)]で、19世紀および20世紀初頭の、翻訳による吸血鬼小説20篇をチェックすることができた。アルトマンの『ドラキュラドラキュラ』にのみ、はっきりと吸血鬼の眷属としてのコウモリが登場するが、この作品は、そもそもストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』のパロディである。後者のアンソロジー[24)]中の、ユライア・デリック・ダーシーによる「黒い吸血鬼」には、1箇所吸血鬼の始祖として強い繋がりを持つ「マダガスカル海賊蝙蝠」*についての言及があった。アン・クロフォードの「カンパーニャの怪」中には、「蝙蝠姫Vespertiliae」という名の、美しい女吸血鬼が登場する。このほか、気がつく限りは、明確なコウモリのイメージは見当たらない。スラブ地方では、古来夜鳥のようなイメージの魔物が飛んできて血を求めると言うことであるが、これも明確なコウモリではないようだ[21)]。

*マダガスカル海賊コウモリという動物は、実在せず、マダガスカルオオコウモリという巨大コウモリの誤記とも解釈できる。

5 ブラム・ストーカーのドラキュラ

ジャン・マリニー[2)]によれば、オスカー・ワイルドはブラム・ストーカーの『ドラキュラ』をして、「今世紀で最も美しい小説」と評したとのことである。ス

トーカーは、オスマン帝国と敵対し勇猛に戦った串刺し公・ヴラド・ツェペシュ(1431–1476)をモデルとして、『吸血鬼ドラキュラ』[1]を創作した。彼は、トランシルヴァニアの吸血鬼伝説について100ページ以上のノートを作り、小説中でそれらの吸血鬼の属性――影がない、普通の食事をしない、にんにくと十字架を恐れる、自在に動物に変身するなど――を余すところなく盛り込んだ[2]。

さて、問題の吸血コウモリである。自在に姿を変える伯爵は、イギリスに到着し、デメテル号から脱出するときは巨大な犬に変身し、別の機会には霧にも姿を変え窓の隙間から侵入する。コウモリが初登場するのは8月13日、ミナ・ハーカーの日記においてであり、ここでルーシー・ウェステンラを襲い、吸血している。これを含め、コウモリに言及する記述は17回みられ、うち窓ガラスに映る影や、羽ばたきの気配も含めると、実際にコウモリが登場するのは10回であり、その他7回は、登場人物によるコウモリについてのコメントや解説である。

伯爵がコウモリに変身し、犠牲者を訪れるのは歴然としている。しかし、吸血するときは、伯爵本来の姿である。ブラム・ストーカーは、吸血コウモリについてのビュフォンに始まる博物学的文献等も、読み漁ったことは間違いないだろう。登場するセワード医師は日記(9月18日)に、パンパスの牧場主であるクィンシー・モリスの説明によると「ヴァンパイアと呼ばれるでかい*吸血こうもりがいるんだが、夜中に馬がそいつに襲われ…立っていられなくなるまで、出血してね。地面に転がる馬を、銃で楽にしてやらなきゃならなかった」と記す。ここに至っても、ビュフォンに由来する吸血コウモリのイメージが残っているのだろう。また、セワードは、ロンドン北部に生息する野生の無害なコウモリに混じって、船乗りが持ってきた「南方産の凶暴な」コウモリが野生化している可能性を指摘した。あるいは、ロンドン動物園から逃げ出した吸血コウモリの変種がいるのかもしれない、とも考察している。「吸血コウモリ」あるいは外来種という具体的な指摘は、ここ2箇所だけではあるが、すでに悪者の外来種に対する、社会的な問題意識が発生していたのである。読者は、(田内志文翻訳の文庫版では)450ページにわたって17回出てくるコウモリのイメージを植え付けられ、小説中のクライマックスの一つ(セワードの10月3日の日記中)、レンフィールドが殺され、ミナが寝室で吸血された直後、モリスが目撃したという説明によれば、伯爵がコウモリの姿で、西へ向かって逃げ去って行ったという強烈な残像を共有することになる。私は、ストーカーのコウモリに対する傾倒ぶりは並々ならぬものであり、吸血鬼がコウモリに変身して犠牲者を襲うようになったのは、『ドラキュラ』において文学史上初めて現れたことだと考えるのが妥当だと結論づけたい。

ミナとジョナサン・ハーカー夫妻、医師のセワード、ゴダルミング卿、アメリカ人のクィンシー・モリスらは、合理主義に基づいた知識の発展が人類をより良い世界に導くという信念に支えられ、最先端の科学技術を持って、超自然の脅威であるドラキュラと果敢に対峙するのであるが、当代一の医学博士、哲学者、自然科学者でもあるヴァン・ヘルシングがドラキュラ退治に有効な武器として使うのは、ククリ・ナイフ、木杭、金の十字架、にんにく、聖餅、棺桶の上に置くノバラの枝等々、非合理かつ原始的なアイテムである。かたやドラキュラ伯爵は、血を求めつつも、悲壮な努力により英語を習得、洗練された都市ロンドンの制度、科学知識に追いつくのを必至とする。この辺が本作品を味わう醍醐味である。

ドラキュラやコウモリから学ぶことがあるとすれば――コウモリは、狂犬病など人間にとって有害な病気を媒介することは事実である。しかし、今回のコロナ禍で、私たちは、恐怖心を煽られるあまり新型コロナウィルスの脅威に過剰反応し、不必要な規制を設け、誤った判断をしたことも否めないだろう。コウモリも実害以上にスケープゴートとして扱われた。常に批判精神を働かせ、恐怖心に屈しないこと。
I must not fear. Fear is the mind-killer…

*実際のナミチスイコウモリはティーカップと比べても変わらないくらい小さい。

(了)

参考文献

1) ブラム・ストーカー著『吸血鬼ドラキュラ』(田内志文訳) KADOKAWA, 2014 (角川文庫). 〔原著 Dracula, 1897〕
2) ジャン・マリニー著『吸血鬼伝説』(中村健一訳) 創元社, 1994
3) エリック・シャリーン著『図説世界史を変えた 50 の動物』(甲斐理恵子訳) 原書房, 2012
4) ジャッキー・ヒギンズ著『人間には 12 の感覚がある：動物たちに学ぶセンス・オブ・ワンダー』(夏目大訳) 文藝春秋, 2025
5) de Vuurst et al. A database of common vampire bat reports. Scientific data, 2022
6) Wilkinson, G.S. Reciprocal food sharing in the vampire bat.181–184. Nature 1984
7) ロバート・トリヴァース 著『生物の社会進化』(中嶋康裕, 福井康雄, 原田泰志訳) 産業図書, 1991
8) ジュリエット・クラットン＝ブロック, ダン・E. ウィルソン著『世界哺乳類図鑑』(渡辺健太郎訳) 新樹社, 2005
9) de Buffon, Georges-Louis Leclerc. Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roy texte établi, introduit et annoté par Stéphane Schmitt; avec la collaboration de Cédric Crémière; t.10 1763.

10) Geoffroy Saint-Hilaire, E. Sur les Phyllostomes et les Megadermes, deux Genres de la famille des Chauve-souris. in Annales du Museum d' histoire (ed. Dufour, G.) vol. 15, 181 (d' Ocagne) 1810
11) Goldsmith, Oliver. History of the Earth, and animated Nature. London 1774
12) Brehm, Alfred. Brehms Tierleben. 1860
13) Waterton, Charles. Wanderings in South America. 1825
14) チャールズ・ダーウィン著『新訳・ビーグル号航海記』(荒俣宏訳) 平凡社 , 2013
15) Waterhouse, George R. The Zoology of the Voyage of H.M.S. Beagle Under the Command of Captain Fitzroy, R.N., during the Years 1832 to 1836. Vol.1. Part 2. Mammalia (1838 – 1839), Edited by Charles Darwin. Facsimile Reprint. Nova Pacifica, 1980
16) Masuko, Keiichi. Larval hemolymph feeding: a nondestructive parental cannibalism in the primitive ant *Amblyopone silvestrii* Wheeler (Hymenoptera: Formicidae). Behavioral Ecology and Sociobiology. 1986
17) Salazar, Adrián et al. Aggressive mimicry coexists with mutualism in an aphid. PNAS 2014
18) Bänziger, Hans. Vampire moths. : behaviour, ecology and taxonomy of blood-sucking *Calyptra*. Natural History Publications, 2021
19) Buchner, Paul. Endosymbiosis of animals with plant microorganisms. Revised English version. Interscience Publishers, 1965
20) M. Lisandra Zepeda Mendoza et. al. Hologenomic adaptations underlying the evolution of sanguivory in the common vampire bat. Nature Ecology and Evolution 2018
21) 栗原成郎著『スラヴ吸血鬼伝説考』増補新版 , 河出書房新社 , 1991
22) 篠田知和基、丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』勉誠出版 , 2016
23) G.G. バイロン、J.W. ポリドリ他著『吸血鬼ラスヴァン』(夏来健次 , 平戸懐古編訳) 東京創元社 , 2022
24) 種村季弘編『ドラキュラドラキュラ : 吸血鬼小説集』河出書房新社 , 1986

中央大学図書館 学生ボランティア

りぶさぽ

～ Library Supporters ～

始動!!

図書館では、2026年6月より新たな試みとして、図書館学生ボランティア「りぶさぽ」を結成いたしました。

りぶさぽとは？

多摩キャンパス 中央図書館で活動する、学生ボランティアスタッフ“Library Supporters”の通称です。

2026年度は、有志の学生22名が図書館スタッフとともに、図書館の改善活動や、企画・展示等の実施のサポートといった活動をメインに行っていきます。

普段の活動の様子

メンバーの学生は、それぞれ「企画展示」「読書推進」「学内連携」の3チームのいずれかに属し、初めは図書館スタッフによる数回にわたる講習会や図書館ツアーで知見を広げてもらいました。

その後は、月数回チームミーティングや制作活動を通して、一つ一つの企画を形にしていっています。直近ではオープンキャンパスで館内でのチラシ配りや利用者案内といった対面での活動も行いました。

現在は、秋～冬季にかけて開催予定の様々な企画に向けてチーム毎に準備を進めています。

チーム内活動の様子

これからどのように
中央図書館を活性化してくれるのか…？

まだまだ伸びしろのある「りぶさぽ」の今後の活躍に期待です!!

中央図書館2階が新しくなりました！

8月18日、中央図書館2階利用者エリアが大幅にリニューアルしました。

point 01　南側（桜広場側）を会話可能なコモンズエリアとして設定し、ボックス席を新設！増設したラウンドテーブルとあわせ、グループ学修に適した席が大幅に増えました。エントランス近くにはチェア2脚とローテーブルの組み合わせを8セット配置。待ち合わせしたり、雑誌を読んでくつろいだり。いろいろにお使いください。

point 02　南側閲覧席は奥側に移動し、落ち着いて学修に集中できるエリアを統合しました。会話可能なコモンズエリアとは新聞閲覧台で仕切り、分かりやすくゾーニングしています。

point 03　雑誌コーナーは壁面書架に統一。あわせて最新号展示雑誌の入替も行い、『聴く中国語』など人気の5タイトルが加わっています。壁面に国内、海外の約550誌が並ぶ景色は圧巻！

このほか、3階にも全学無線LAN（CHUO-U）のアクセスポイントを増設しました。CITRASだけでなく、第2・第3・第4閲覧室も通信環境が良好に。これにあわせて第3・第4閲覧室のPC利用制限についても見直しを行う予定です。

図書館では2024年度からリニューアルプロジェクトを開始し、今回がその具体化第1弾となります。さまざまな利用ニーズに応えられるよう進化し続ける図書館に、これからもご注目ください。

日・EU フレンドシップウィーク企画展

「食で読み解くEU―27か国の多様性と持続可能な食卓の現在地」を開催

2026年5月28日（木）から6月16日（火）まで、中央図書館2階展示スペースにおいて、国際機関資料室（EU情報センター）主催による企画展「食で読み解くEU ― 27か国の多様性と持続可能な食卓の現在地」を開催しました。日・EUフレンドシップウィークは、駐日欧州連合代表部と全国のEU情報センターが協力して実施する文化交流企画です。

展示では、EUに加盟する27か国のレシピカードや「食外交」の歴史をはじめ、持続可能な食料政策、GIマークが付いた製品などを紹介しました。さらに、駐日ハンガリー大使館推薦の伝統料理の紹介や、日・EU食材の融合料理の人気投票、EUクイズといった体験企画も実施され、正解者にはEU公式グッズを贈りました。

来場者からは「欧州料理の多様性を知った」「食から国際関係まで理解が深まった」などの感想が寄せられ、身近な「食」を通してEUの多様性と持続可能性を再発見する機会となりました。

新収資料紹介

教職員著作目録　2025.5－2025.10　配架図書一覧　（　　）は所属学部等

著者名		書名	出版社	出版年月	所蔵館	書誌番号
林 庭毅 明田川 聡士(文)	著 訳	裏組織の脚本家	書肆侃侃房	2025.3	中言	BB01725514
明田川 聡士(文)	著	李喬的自我追尋：「歷史素材小說」的寓意與可能性	國立臺灣大學出版中心	2025.7	中言	BB01733202
浅倉 和俊(名), 渡辺 竜介	著	〈公認会計士試験〉財務会計論の重点詳解 第6版	中央経済社	2025.7	中央館	BB01729352
天田 城介(文) ほか 数土 直紀, 山田 真茂留	著 編	社会学 (アカデミックナビ)	勁草書房	2025.4	中央館/社会/法学部	BB01725690
飯尾 淳(国情)	著	Pythonで学ぶAI開発入門：ライブラリを活用したAIの作り方	エムディエヌコーポレーション	2025.4	中央館/理工	BB01723988
生稲 史彦(戦略) ほか	著	経営情報論 = Basics of management information	有斐閣	2025.4	中央館/理工/BS/iTL	BB01724324
石井 夏生利(国情) ほか	編著	個人情報保護法コンメンタール 第1巻(第1条～第59条) 第2版	勁草書房	2025.2	中央館/法学部/LS/iTL	BB01722418
礒崎 初仁(法) ほか	著	地方自治 新2版 (ホーンブック)	北樹出版	2025.4	中央館/法学部	BB01725636
礒崎 初仁(法) ほか	編著	ポストコロナの自治体危機管理：徹底検証!全国自治体1300日の新型コロナ対応とその教訓	第一法規	2025.6	中央館/法学部	BB01728057
井田 良(名)	著	基礎から学ぶ刑事法 第7版 (有斐閣アルマBasic)	有斐閣	2025.7	中央館/法学部/LS/iTL	BB01729265
岩田 重則(総)	著	火葬と土葬：日本人の死生観	青土社	2025.5	中央館/法学部	BB01726134
植野 妙実子(名)	著	権力の自律・協働・統制：日仏比較を通して (日本比較法研究所研究叢書 137)	中央大学出版部	2025.3	中央館/法学部/LS	BB01725088
宇田川 幸大(商) ほか	著	体験者「ゼロ」時代の戦争責任論	岩波書店	2025.7	中央館/法学部	BB01730898
榎本 俊一(商)	著	国際貿易・ビジネスの再構築：サプライ・チェーンの企画・形成・運営の観点から	中央経済社	2025.3	中央館	BB01723995
遠藤 研一郎(法)	著	はじめまして、法学：身近なのに知らなすぎる「これって法的にどうなの?」 第3版	ウェッジ	2025.7	中央館/法学部/iTL	BB01729954
岡嶋 裕史(国情)	監修	知識ゼロからのChatGPT入門：生成AIに何をしてもらうと便利なのか	幻冬舎	2025.3	中央館/法学部/iTL	BB01723465
岡嶋 裕史(国情)	監修	世界一かんたん!70歳からのスマホ使いこなし超入門 (ブティック・ムック 1840)	ブティック社	2025.5	iTL	BB01725534
岡嶋 裕史(国情)	監修	日本一わかりやすい70歳からのスマホ術：「困った」「知りたい」をなんでも解決する本	宝島社	2025.3	iTL	BB01724393
岡嶋 裕史(国情)	著	岡嶋裕史の情報!大学入学共通テスト過去問解説 2026年版	技術評論社	2025.6	iTL	BB01728964
岡嶋 裕史(国情)	著	70歳から愉しむスマホとLINE (光文社新書 1371) ハンディ版	光文社	2025.7	iTL	BB01730712
岡嶋 裕史(国情)	著	やっぱりいまさら聞けないITの常識：2026-2027 (日経文庫 B149)	日経BP日本経済新聞出版	2025.8	中央館/iTL	BB01731104
樫山 和男(理) ほか	著	例題で身につける数値解析：Python,C++,Fortranサンプルコードつき	丸善出版	2025.7	中央館/理工	BB01729978
金井 貴嗣(名) ほか	著	独占禁止法の基本判例	有斐閣	2025.8	中央館/法学部/LS	BB01731198
国本 伊代(名)	監修	一冊でわかるメキシコ史 (世界と日本がわかる国ぐにの歴史)	河出書房新社	2025.5	中央館/法学部	BB01727249
佐伯 仁志(法務), 只木 誠(法) ほか 里見 聡瞭(法) ほか 谷井 悟司(法)	編 著 訳	刑事法の理論と実務 7	成文堂	2025.7	中央館/法学部/LS/iTL	BB01728901
佐藤 鉄男(名) ほか 阿部 純一(法務) ほか	編 執筆	家族破産法への誘い：家族法と倒産法の交錯	商事法務	2025.9	法学部/LS	BB01732566
清水 善仁(文)	著	公害の記憶をどう伝えるか：「公害アーカイブズ」の視点	吉川弘文館	2025.9	中央館/日史/法学部	BB01732153
鈴木 俊幸(文)	編	様式と造本 (シリーズ「本の文化史」 6)	平凡社	2025.5	中央館/国文	BB01727073
髙尾 直知(文) ほか	編著	病と障害のアメリカンルネサンス：疫病、ディサビリティ、レジリエンス	小鳥遊書房	2025.5	中央館/英文	BB01727238
田村 威文(経)	著	ニュートン力学で考える企業会計	中央経済社	2025.7	中央館	BB01729357
バウンド 近廣 昌志(経)	著 監修	60分でわかる!金利超入門	技術評論社	2025.3	中央館	BB01726481
辻 泉(文), 浅野 智彦	編著	リフレクシブ・ライブズ：青少年研究会調査にみる「曲がり角」の時代の若者たち = Reflexive lives	勁草書房	2025.6	中央館/法学部	BB01728754
辻 泉(文) ほか	編著	アイドル・オーディション研究：オーディションを知れば日本社会がわかる	青弓社	2025.9	中央館/法学部	BB01731723
都筑 学(名)	著	環境移行期の時間的展望の発達における個人差：児童期・青年期における3つの縦断調査データの分析	福村出版	2025.9	中央館	BB01732340
土橋 茂樹(名)	著	三位一体：父・子・聖霊をめぐるキリスト教の謎 (中公新書 2866)	中央公論新社	2025.7	中央館/哲学/法学部	BB01730111
堤 和通(総)	編著	「第5修正関係」：二重危険禁止条項 (日本比較法研究所研究叢書 136 米国刑事判例の動向：合衆国最高裁判所判決 9)	中央大学出版部	2025.3	中央館/法学部/LS	BB01725087
中野 暁(商)	著	小売チャネル統合と顧客行動の科学：リアルとオンラインをつなぐマーケティングの実証分析	千倉書房	2025.7	中央館	BB01729981
本沢 巳代子, 新田 秀樹(法)	編	トピック社会保障法 2025 第19版	不磨書房	2025.4	中央館/法学部/LS	BB01724634
荒谷 裕子, 橡川 泰史 野田 博(法) ほか	編著 著	会社法と金融商品取引法の交錯 (法政大学現代法研究所叢書 51)	法政大学出版局	2025.3	法学部/LS	BB01725878
原島 良成(法務) 北村 喜宣 ほか	著 編	条例理論の基礎 (地方自治・実務入門シリーズ)	有斐閣	2025.7	中央館/法学部/LS	BB01729269
福原紀彦先生古稀記念論文集編集委員会 平泉 貴士(法), 三浦 治(法), 杉浦 宣彦(戦略), 宮下 修一(法務), 岩隈 道洋(国情), 小宮 靖毅(法), 酒井 克彦(法務), 佐藤 修一郎(理)	編 執筆	現代企業法の新潮流	文眞堂	2025.3	中央館/法学部/LS	BB01725465
福田 純也(理)	著	外国語学習に潜む意識と無意識 新装改訂版	開拓社	2025.8	中央館	BB01730585
藤田 進ほか 堀内 隆行(文) ほか	編 著	世界史の中の「ガザ戦争」	大月書店	2025.8	中央館/西史/法学部	BB01731144
村上 宏昭 堀内 隆行(文), 磯部 裕幸(文) ほか	編著 執筆	生体管理の近代史：個人識別技術と身体の情報化	明石書店	2025.2	中央館/西史/法学部	BB01723194
波多野 澄雄, 宮城 大蔵(法)	編著	日本外交をどう考えるか：日米安保・歴史問題から沖縄まで	慶應義塾大学出版会	2025.4	中央館/法学部	BB01725689
宮間 純一(文)	著	明治維新という物語：政府が創る「国史」と地域の「記憶」 (中公新書 2855)	中央公論新社	2025.5	中央館/日史/法学部/iTL	BB01727171
宮本 太郎(法)	編著	子どもが消えゆく国の転換	勁草書房	2025.6	中央館/法学部	BB01728776
オイゲン・ローゼンシュトック=ヒュシィ 村岡 晋一(名) 竹中 真也(理)	著 編訳 訳	文法のコペルニクス的転回：ローゼンシュトック言語論集 (叢書・ウニベルシタス 1184)	法政大学出版局	2025.5	中央館/哲学	BB01727410
村上 研一(商)	著	日本経済「没落」の真相：貧困化と産業衰退からどう脱却するか	旬報社	2025.5	中央館	BB01726554
ピーター・シンガー 矢島 壮平(国情)	著 訳	道徳は進歩する：進化倫理学でひろがる道徳の輪	晶文社	2025.2	中央館/法学部/iTL	BB01722416
山口 真美(文)	著	ままならぬ顔・もどかしい身体：痛みと向き合う13話	東京大学出版会	2025.4	中央館/法学部	BB01726143
山﨑 朗(経) 松浦 司(経) ほか	編著 著	地域創生の新しいデザイン：地域の潜在力を付加価値に	中央経済社	2025.5	中央館/法学部	BB01725260
日本文学アクティブラーニング研究会 吉野 朋美(文) ほか	著 執筆	古典を学んでよかった!と思える探究型授業のつくりかた：「文学」「国語」のためのアクティブラーニング	文学通信	2025.3	国文	BB01724954
渡邉 究(理)	著	すごすぎる数の図鑑：数字がわかれば世界がわかる!	KADOKAWA	2025.7	理工	BB01730100

My CUL　（マイ・クル）
中央大学図書館広報誌 No.48
（2026年 11月発行）

編集発行　中央大学図書館
〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
TEL.042-674-2546

URL: https://www.chuo-u.ac.jp/library/